

# 岡政先生 会見記（その一）



松川 由紀子

はじめに

昨年のことでした。夏休み前のある日、本田和子先生に「岡山に帰省したら、岡先生にインタビューに行つてはどうかしら」といわれました。たまたま、岡山は私の郷里なのでした。

さっそく、岡山大学の秋山先生に、岡先生の住所を知らせていただきました。夏休み直前に、岡先生に封書でインタビューをお願いしたところ、快く応じてくださいました。そして、一人では心細いので、同郷の友人小野京子さんに応援を求め、二人でいろいろとうちあわせました。

まず、岡先生について理解を深めるために、また、何についてお話ししていただくかを決めるために、岡山大学教育学部図書

室に行つて、『保育に生きた人々』（風媒社）、『岡山県保育史』（フレールベル館）、『附属幼稚園八十年の歩み』（同図書館所蔵）、『倉橋惣三選集』（全四巻、フレールベル館）などの本を読みました。二人とも、本の中でしか知らない岡先生に、もうすぐお会いできるのだと思うと興奮していました。そして、先生のこれまでの歩みをたどりながら感動を覚えるのでした。

## 先生のこれまでの歩み

明治二十年、岡山に生まれ、四十年四月、東京女子高等師範学校（現、お茶の水女子大学）保育実習科に入学し、翌四十一年三月卒業、同四月、岡山女子師範学校（現、岡山大学教育学部）附属幼稚園へ主任保母として赴任されました。

当時は一般に、恩物中心の形式的な保育、子どもに知識を与えらるという保母中心の保育でした。それに対し、先生は、子どもの自発性、子どもの生活を中心にした保育をめざされました。そして、赴任するとさっそく、その実践にとりかかりました。まず、子どもに知識を教えるための教師用黒板を、いわば、大きな遊具として子どもが自由に使えるようにしました（明治四十一年）。教卓に向かって並んでいた（今日の小学校のような）ふたり机を、グループ活動用に配置がえしました（四十二年）。もちろん、教卓もとり払いました。また、朝の会集や鐘の合い図をなくして（四十四年）、時間にとられない保育を求められました。恩物も、四十二、三年ごろから、子どもの遊具として自由に使わせました。

このように、子どもの自由な活動、自発性、子どもの生活を中心にして、外からの形式的な束縛をなくそうと、次々と実践に移されたのでした。時間に縛られない保育、場所に縛られない保育（組を廃し、子どもに全園を開放しました）、子どもの生活中心の保育に向かって、お若い情熱で体当たりされたのでした。

そして、倉橋惣三氏は、「自分の理論は、岡山の岡政女史の実践によって完全に開花している」といわれ、岡先生の保育を

高く評価されています。当時、倉橋理論は実践されにくい、といわれていたのです。

また、保育者養成にも積極的に取り組まれ、岡山の保育は、先生の肩に重くかかっておりました。そして、昭和八年、先生は病に倒られました。日本が軍国主義に進むにつれ、病床の先生はどんなにか悲しまれたことでしょう。

戦後も保育者養成に尽くされ、また、倉敷の御国幼稚園で子ども中心の保育に取り組まれたのでした。

ここで、先生のお人柄を思わせる次の文章を引用しておきます。

幼児の保育については、そのむずかしさを、いままなおしみじみと考えさせられるのです。ここであえて保育というのは、教育といえ、わたしには過去の体験から、たいくつな子どもを無理に教室に閉じこめて、先生が声をかからして授業をする姿や、運動場で号令をかけて体操をする姿が浮かんでくるので、幼稚園には、なんとなく、自由で温かい親切な指導が感ぜられる、保育という言葉がふさわしいと思われるからです。……

保育の目標や内容については……文部省から何回か示さ

れてきましたが、それは単なる法文で、わたしたちはそれを参考にして、ほんとうの目標や内容を自主的に考えてゆかねばならないと思って、努力してきましたが、どうしても満足できるものは得られないのです。いまなお、ああかこうかと迷っておる始末で、明治四十一年から今日まで保育にたずさわり、ときには、おこがましくも幼稚園の先生を指導する立場にたったりしながら、このありきまで自分ながら、あいそが尽きる次第です。

保育は、園児の心身の弱さに対する保護と、その成長発達に対する妨害の除去と、成長発達を促進するように環境を整えることにあるのではないかと一応は思ってみます。また、幼児は、性格の面でも、発達の中でもひとりびとちがつておるので、一斉的な扱いは、集団生活のため止むを得ないもののほかはなるべく避けて、個人の指導に力をいれるべきではないかとも思ってみます。あれこれと原理的にさまよいながら考えて、さて、それをどう具体化するかという段になると、そこにはまた別にいろいろな条件——わたしの能力の不足も含めて——がからんでくるので、これでよいというカリキュラムは、ついでできたためしがないわけです。……………

……………幼児の要求には表面的なものと、内面的なものと

あり、深く内面的なものをとらえてみると、意識的ではないかもしれないが、自由と平等を求め、真実を愛し、自他のために尽そうとする理念の芽生えがある……………。

幼児の要求を満たし、その発達を促進してゆこうとする幼児中心の保育の考え方は、フレীবールの幼稚園創設の精神でもあり、現在世界の保育の底流ともなっておると考えられます。……………  
(昭和三十八年、岡山県保育史、序より)

なお、これを書くにあたって、『保育に生きた人々』『岡山県保育史』を特に参考にしたことをつけ加えておきます。また、私の勉強不足のために、先生の手記、日記とか、先生と親しい方々の回想録、談話とかにあたっていいないことを断わっておきます。

### 先生との「出会い」

私たちは、これから保育の道を歩もうとしています。その道の先輩でおられる先生に、また、大変な情熱、見識、勇気をもたれて歩まれた先生に、お会いできることを素直にただうれしく感じておりました。

そして、先生のお若いころの思い出、保育者をめざされたご

動機、また、子どもに何を期待して自由保育（生活保育）をされるのか、などについてお話しただくことをお願いいたしました。

その日、八月十八日、午後三時。先生はわざわざ、岡山の石幼稚園までおいでくださいました。私たちは緊張しながらも期待に胸をふくらませておりました。二階の明るい一室に案内され、始めて先生にお会いした時、小柄ではありますが、とうてい八十五歳の年齢には見えず、若く元気なように驚きました。ご同席された出石幼稚園長は、先生の教え子で、ぎこちない聞き方の私たちをよく助けてくださり、なごやかな時を過ごすことができました。園長と先生がかもしだされる親愛なふん囲気に、しばしばうっとりとしたものでした。

まず、あいさつと自己紹介を終え、テープレコーダーに録音したいことをお願いしましたが、「恥ずかしいから」とおっしゃって、どうしても許可していただけませんでした。そこで無理にお願いするのどうかと思い、小野さんがメモをとることにし、私は先生との個人的な「出会い」の場にただひたつたいと思ひ、贅沢にも幸福な時を過ごさせていただきました。そこで、先生の具体的なお話の内容については、次回の小野さんのレポートにゆずり、ここは、私の個人的な感動、印象を記

します。

先生は、「若いころのことはもう忘れた」とおっしゃりながらも、小学校を卒業した時、ちょうど女学校が創立されたことを話してくださいました。当時、小学校を卒業するのは、本当に数が少なかったそうです。女学校を卒業されて、そこで教師をされていました。でも、知識の受け売りはおもしろくなかった、と話されました。そばにある幼稚園が楽しそうだったので、保育者にならなくなつたそうです。しかし、近所の手前、東京に受験に行くとは言えず、博覧会見物に行くことにして、入試を受けられたのです。「不合格だろうと思って岡山に帰っていたら、合格のしらせがきて、その時は、うれしかった……」と、当時を思い出されてか、ふつと言葉がとぎれてしまわれました。女高師では、午前中はずっと幼稚園で実際の保育に参加されていたそうです。

お若いころのことを静かに話されながら、先生は何を考えていらしたのでしょう。私たちはただ、お話に聞き入っておりました。

それから、保育のお話を始められました。今思えば、六時すぎまで、お話をきかせていただき、私たちの無遠慮を恥じるのですが、それくらい、二人とも夢中でした。表面的には大変静

かに時が流れていたのですが、私たちの心の中には何かが燃えているようでした。先生は何度も、「子どもの生命、子どもの自発活動は遊びです」と強調されました。その言葉をただ言葉としてでなく、その言葉の内にある、保育の実践、保育の心に、私たちは素直に感動し、先生の人柄に魅了されてしまいました。

先生との、先生という人間との「出会い」によって、私は何か言葉では言い表わせないものを与えられました。それは、ちょうど、始めて保育実習に参加して、実際に子どもと接した時、何か胸の中にこみあげてくるもののようにでした。

故郷での、なつかしい岡山弁での、あのさわやかな談笑のひとときを、いつまでも忘れないでしょう。あのあとの快い気持ち、何か勇気がわいてくるような自分に、別の自分を感じたりしました。先生の話される言葉、表情、態度が、今なおあざやかに心の中によみがえってきます。

### おわりに

今私は、個人的な感情をゴタゴタ書いたこの文章をもどかしく思っております。

また、あの時は夢中でしたから、ただ感激のみでしたが、しだいにそれが悩みとなって私にふりかかってきたのです。先生

のお言葉に答えられない無力な自分に気づくのです。そういうば、心なしか、先生はおさびしそうなごようすでした。

先生の保育者をめざされた動機、保育実践を支えた情熱が何であったのか、今なおわからないのです。それは、言葉にはならないものかもわかりません。これから私自身がさがし求めていくべきことなのでしょう。けれども私は、あの場で、先生は子どもに何を期待して保育をされたのか（先生はどんな児童観をもつていらしたのか）、という問いに対する答えを（その答えのみを、といってもいいくらい）、性急に（心の中で）求めておりました。あとで、ゆっくり考えると、「子どもの生命は遊びです」と強調されたこと、それがその答え（への手がかり）だったのだらうと思うのです。また、先生との「出会い」という今回の体験が、私自身の研究課題である幼児教育（保育）史研究にも積極的な豊富なきっかけを与えてくれたこと、を喜びます。と同時に、「一度、実際にやってみるとわからんわな」とやさしく最後にいわれた言葉が大変印象的でした。

そうこうしている時、何度か津守先生に、「岡先生にお会いしたことをあなたたち二人のものにしてはいけません。原稿を書く義務がある」と励まされ、怠惰な自分たちを反省させられました。そして不十分ながら、このようにまとめたのです。

二人で相談した結果、岡先生というあまりにも大きな人物なので、二人で一つの報告にまとめることは不可能に近いように思われ、二人の持味を生かして、いくらか分担して、報告することにしたのでした。(この文章は、昨年に何回か報告した時のメモをもとに、今回いくらか書き直したものです)

この報告は、あのふん囲気を、あの人柄を、私の乏しい文章能力のために、勉強不足のために、またお会いした日からかなり時が経っていることもあって、十分に伝えることができなくて残念に思います。

しかし岡先生が、子ども信頼に、人間信頼に生きていらっしやるということは、どなたにもわかっていただけることでしょう。

なお、先生は今は、岡秀と改名されておられます。最後に、先生のご健康をお祈りして、ペンを置きたいと思えます。

(お茶の水女子大学大学院)

### 「幼児教育の源流」(VII)

#### 〈参考文献〉

- 1 J. Dewey: My Pedagogic Creed 1897
- 2 J. Dewey: The School and Society 1899
- 3 J. Dewey: The Child and the Curriculum 1902
- 4 J. Dewey: How We Think 1910
- 5 J. Dewey and E. Dewey: Schools of Tomorrow 1915
- 6 J. Dewey: Democracy and Education 1916
- 7 宮原誠一: 学校と社会
- 8 砂沢喜代次編: デューイの教育思想研究  
(デューイの著作については前記のほとんどが邦訳されています)

